

舊長藩士卒階級一覽表

舊長藩士卒階級一覽表

二六八

階級名	創始時代	祿高	摘要
一門	輝元時代	自一萬七千石 至六千石	右門トハ一族ト云フカ如シ一門ハ六家アリ四ク三丘五戸、 世々老臣トナリテ治元十二年官制改革ノ後大野毛利是ナリ、 年九月大夫ノ名ヲ廢シ上士ト稱ス
永代家老	自一萬三千石 至一萬二千二百石	至一萬三千石 至一萬二千二百石	老臣ニシテ別格ノモノニ家アリ永代家老トス曰ク須佐益田、 宇部直原是ナリ、明治元十二年官制改革後大夫ト稱ス明治 二年大夫ノ名ヲ廢シ上士ト稱ス
寄組	秀就時代	自六千二百石 至一千二百石	往昔ハ寄組ノ名ナシ秀就時代高祿ノ士ヲ録シテ此階級ヲ置 カスルト云フ義ヨリ起レリト總テ六十二人宛分配シテ統寄 カスル直屬タリ明治元十二年十月二十日寄組ヲ上士ト稱シ 以下ヲ中士ト稱ス
手廻組	祿高不定	祿高不定	手廻組トハ藩主ノ接近ノ職務ニ服スルモノヲ以テ其在職中特 ニ細入組ハ藩主ノ御用ニ依テ八組ノ如ク世襲ノ一階級ニアラス シテ或ハ八組ニテハ寄組トシテアリ其階級ハ手廻組トシテハ 而シテ其統寄ニテハ寄組トシテアリ其階級ハ手廻組トシテハ 手廻組トシテハ寄組トシテアリ其階級ハ手廻組トシテハ
物頭組	祿高不定	祿高不定	物頭組ハ大組頭ヨリ大組頭ニ至ルモノヲ以テ組司合士ト唱 ル名稱ハ慶應元年七月廿七日廢止セラレ更ニ中隊司合士ト唱 ム明治元十二年十月二十日廢止セラレ更ニ中隊司合士ト唱 ム明治元十二年十月二十日廢止セラレ更ニ中隊司合士ト唱
大組	自四千六百石 至四百石	自四千六百石 至四百石	一ツニ馬廻リトモ云フ總テ八組アリ四テ八組トモ稱ス寛永二 年充テ六組ニテ歸國休養セシム他ノ六組ハ藩城ノ守衛ニ備 守備ハ慶應元年七月十一日廢止シテ各組長ヲ大組頭ニ寄組 頭トシテ其統寄ニテハ寄組トシテアリ其階級ハ手廻組トシテハ 十二月中士上等ト稱ム
遠近方記方録	百五十石以下八 組士	百五十石以下八 組士	遠近方ノ記録ヲ調査保管スル役ナリ
記録書調方	二十石以下無給 通士	二十石以下無給 通士	
江戸番手大番	明和五年		
御撫育方頭人	二百石以下百石 迄ノ八組士		奥番頭格ヲ有スルモノ之ニ任ス撫育局ノ命職ハ特別會計 ニシテ行國兩府ト雖モ于奥スル事能ハス其出納命會計 藩主ノ直裁トス禮下ノ用掛ハ直目附之ヲ兼ヌ、檢使ハ多 ク大檢使ヨリ轉任スル如シ
御撫育御用掛	三百五十石以下 八組士	毎月一石	撫育局ハ元ト藩主ノ直轄ニテ三年八初メ藏元内ニアリシカ 明和元年十月城内へ移シ安永三年九月朔日江戸方ニ屬シ 江戸方所用所格トナル後表番頭格ヲり慶應元年十月二 十九日山口堅小路 助右衛門宅ニ於テ執務ス

舊長藩職役一覽表

三〇七

毛利藩のユニークさを凝縮し
歴史の山口県を代表する
全国どの藩にも比類なき遺産！



限定二百部復刻

もりのしげり

■小社がすでに県内の史書二百点以上を復刻してきた現在「山口県で大河ドラマを迎える年明けを飾る本」といえば、この『毛利乃志希里』を置いて皆無です。

■実は四十年前、私が史書復刻の仕事をはじめたとき第一弾を本書で飾りたかったのに、すでに県内他社が旗揚げに使っており「いつか必ず小社で！」と書いていました。

■そしてこのほど「会津藩や東軍関係では他の追従を許さないが、西軍関係には触れることさえ皆無」といわれる、直木賞作家・中村彰彦氏から本書について極上の推薦文を賜ったのです。会津の目まで借りて、全国の研究者に毛利藩として本書の普遍性とユニークさをよく理解し役立ててほしい本ですが、あえてその欠点をあげれば、限られた紙面に膨大な内容を詰め込んでいるため、文字が小さく読みにくいことです。

■今回は大胆な拡大復刻によって前頁見本のようにとても読みやすくなる上、かつての毛利藩そのまま「形にとられず丈夫で実質的」な造本に仕上げます。

■旧版をお持ちのお方へも、これを機にいつまでも気持ち良く使える今回の復刻版を自信满满、心からお薦め致します。
(松村 久)



事件	年月日	時代	摘要
事			
福原越後	元治元年七月朔日	慶親	福原越後書ヲ勸修寺家ニ呈シ入京ノ朝允ヲ得テ長藩有ニ歎願ノ極旨ヲ辯明セント請フ
伊藤願	元治元年七月三日	同	囊ニ二人ハ外艦ニ送ラレテ歸ルヤ英提督ニ請ヒ回答ヲ十二日ト約ス而モ藩内情勢固ヨリ未タ外國ト和親スル能ハス此ニ於テ更ニ二人ヲ姫島ニ遣リ三ヶ月ノ延期ヲ乞ハシム英人聽カスシテ去ル
進發臨時祭	元治元年七月六日	同	慶親父子菽ニ赴キ祖先ノ廟ニ詣シ臨時祭ヲ行ヒ世子ノ進發ヲ告ク
防長士民歎願書	元治元年七月八日	同	久阪眞木等長谷川鐵之進原道太ヲ淀城ニ遣リ退去ノ命ヲ奉シカタキヲ陳シ更ニ陳情書二通ヲ呈シ別ニ防長士民歎願書ヲ添フ
九卿上書	元治元年七月九日	同	北小路石山ノ九卿連署書ヲ朝廷ニ上リ暗ニ會藩ノ爲ス所ヲ非トシ聲下内亂ノ虞アルヲ説ク
筑波黨戰鬥	元治元年自七月九日至十月廿三日	同	筑波山黨七月九日暮兵及ヒ水戸兵ヲ下妻ニ收リ同二十五日其黨水戸ニ入り市川派ト戦ヒ退ク十月廿三日那珂湊屯集ノ兵千六百人暮軍ニ降ル武田伊賀等走ル
佐久間象山遭難	元治元年七月十一日	同	松代藩士佐久間修理屋屢々中川宮山階宮邸ニ出入ス攘夷派浪士之ヲ惡ミ京都三條街ノ邸ニ刺ス其刺客ハ松浦虎次郎、河上彦齊ナリト云フ
三十九卿上書	元治元年七月十二日	同	一條門流三十九卿再ヒ上書シテ寛大以テ長藩ヲ遇シ父子ヲ登下ニ召シ攘夷ノ意ヲ貫徹スヘキヲ主張ス
益田右衛門介	元治元年七月十三日	同	益田右衛門介兵六百ヲ率ヒ六日山口ヲ發シ七月十三日大阪ニ入り澱川ヲ溯リ十四日山崎ノ對岸橋本ニ至リ十五日男山ニ營ス十七日長藩ノ諸將男山ニ會ス久阪等ハ一旦大阪ニ退キ世子ノ上阪ヲ待テ事ヲ舉ケント來島眞木等聽カス遂ニ十九日ノ變トナル
世子三田尻	元治元年七月十四日	同	世子定廣十四日三田尻ヲ發艦清末侯ヲ先鋒ニ命ジ浦添之助ヲ斥候備トシ毛利宣次郎ヲ前備トシ中軍ハ世子之ヲ總ヘ五卿之ニ伴フ而シテ吉川監物ヲ殿備トス二十日京都ノ變報ヲ得テ多度津ヨリ船ヲ班シ二十三日上關ニ著シ二十六日三田尻ニ歸ル
發艦			

説明文の大きさ

このたびの復刻版
これまでの復刻版

益田右衛門介兵六百ヲ率ヒ六日山口ヲ發シ七月十三日大阪ニ入り澱川ヲ溯リ十四日山崎ノ對岸橋本ニ至リ十五日男山ニ營ス十七日長藩ノ諸將男山ニ會ス久阪等ハ一旦大阪ニ退キ世子ノ上阪ヲ待テ事ヲ舉ケント來島眞木等聽カス遂ニ十九日ノ變トナル

世子定廣十四日三田尻ヲ發艦清末侯ヲ先鋒ニ命ジ浦添之助ヲ斥候備トシ毛利宣次郎ヲ前備トシ中軍ハ世子之ヲ總ヘ五卿之ニ伴フ而シテ吉川監物ヲ殿備トス二十日京都ノ變報ヲ得テ多度津ヨリ船ヲ班シ二十三日上關ニ著シ二十六日三田尻ニ歸ル

吉川監物	元治元年七月十六日	同	吉川監物十六日新湊發艦十八日世子定廣ニ鞞ニ會ス京都ノ變報アルニ及ヒ世子ト船ヲ共ニ二十三日上ノ關ニ著シ病ヲ以テ直ニ岩國ニ歸ル
新港發艦			
京師變動	元治元年七月十九日	同	七月十八日洛外ノ長藩兵即日退去ヲ命セラル三大夫會藩ト決死對抗ノ議ヲ定メ會藩討伐ノ旨ヲ朝廷ニ奏シ且在京ノ諸藩ニ告ク朝廷遂ニ長人討伐ノ命ヲ幕府ニ下ス夜半福原ハ七百ノ兵ヲ率キ伏見ヲ發シ藤ノ杜ニ至テ戰ヲ開キ利アラシテ山崎ニ退ク國司ハ八百ノ兵ヲ以テ蛤門ニ向フ夫ヨリ交戦時ヲ久フシ長軍遂ニ敗ル
來島又兵衛死	同	同	名ハ政久性剛毅ニシテ膽略アリ尤モ武術ニ長ス曾テ遊撃隊ヲ編制ス元治元年藩主ノ冤ヲ訴フル爲山崎ニ屯シ十九日京師蛤門ニ迫リ彈丸ニ中リ起タス年四十九明治二十四年四月八日正四位ヲ贈ラル
久阪義助戰死	同	同	名ハ通武字ハ實甫初メ玄瑞ト云フ秋湖江月齋ノ號アリ個儻大志アリ松陰門下ノ雙壁ト稱セラル勤王攘夷ノ大義ヲ唱ヘ王事ニ盡ス藩主ノ冤ヲ訴フル爲京師蛤門ニ至リ開戦トナリ同邸内ニ自刃ス年二十六明治二十四年四月八日正四位ヲ贈ラル
寺島忠三郎死	同	同	名ハ昌昭字ハ子大、刀山、斃不休齋ト號シ牛敷春三郎兒島百之助等ノ變名アリ性豪毅大節アリ松陰門下ナリ元治元年久阪等ト事ヲ共ニシ鷹司邸内ニ自刃ス年二十二明治二十四年四月八日正四位ヲ贈ラル
入江九一戰死	同	同	名ハ弘毅字ハ子遠河島小太郎ト變名ス性沈毅ニシテ松陰門下ニ學フ久阪寺島等ト事ヲ共ニシ負傷自刃ス年二十七明治二十六明治二十四年四月八日正四位ヲ贈ラル
桂小五郎潜伏	同	同	小五郎ハ京變敗北後洛中ニ潜伏スルコト五晝夜破衣ヲ被リ伴テ乞焉ト爲リ或ハ橋下路頭ニ伏シ一生ヲ萬死中ニ得テ但馬ニ遁レ遂ニ城ノ崎ニ潜伏シテ京師ノ動靜ヲ窺フ
加州藩世子退軍	同	同	加州藩世子長藩志士ト約スル所アリシヲ以テ十九日京變ノ砲聲ヲ聞クト同時ニ加州兵ノ一部ヲ率キ遂ニ京都ヲ去リ大津ニ退ク是ヨリ加州藩内訌アリ勤王派遂ニ敗ル
乃美織江退郎	同	同	京都藩邸留守居役乃美織江堺町門ノ邊火起リ彈丸藩邸ニ及ヒ事ノ敗ルルヲ知り火ヲ藩邸ニ放テ西本願寺ニ逃ル
天王山	元治元年七月二十日	同	京師ノ戰ニ參加セシ眞木和泉、池茂四郎、西島龜太郎、加藤常吉、加屋四郎、中津彦太郎、能勢達太郎、松浦八郎、松山深藏、松田五六郎、小阪菊次郎、安藤眞之助、酒井庄之助、岸上弘、宮部春藏、廣田精一、千屋菊次郎ノ十七士天王山ニ上リ自殺ス明治ニ至リ各贈位アリ

『もりのしげり』の使い方

作家 中村 彰彦

このような書きもので自己紹介をするのは気が引けるが、私は歴史小説や史伝、歴史エッセイなどを執筆しているもの書きである。当然ある作品を書きはじめるにあたっては種々の史料を探し求めることから出発し、その史料に描かれたところの正否を判断する必要に迫られる。

しかし、歴史にまつわる文章を書くのに必要なのは、実は史料だけではない。各種の史料を幅ひろく読み込んだ人のまとめた家系図、年表、職制表、婚姻関係一覧表、組織一覧表といった後世の編纂物をつまぐ使いこなすことができれば、テーマとする時代や人物に対してより容易に理解を深めることができる。

そのような意味において私がうれしかったのは、新人物往来社が昭和五十八年（一九八三）から六十一年（一九八六）にかけて『日本史総覧』六巻、補巻三巻を刊行したことであった。これによってわれわれは「天皇一覧」「鎌倉幕府諸職表」「徳川將軍妻妾一覧」「明治前期要職一覧」といった先人たちの貴重な成果を踏まえつつ執筆ないし研究を進めることが可能になったからだ。

ところが右の『日本史総覧』の刊行開始に先立つこと六十四年、大正五年（一九一九）のうちに、旧長州藩毛利家とその支藩については『毛利一族史総覧』と名づけてもよい好著が出版されていた。それが本書『もりのしげり』。変体仮名で表記すれば『毛利乃志希里』である（非売品、昭和七年増補訂正版刊行。同四十四年、赤間関書房より復刻。）

編者時山弥八氏は「毛利家編輯所二在勤」した人で勤務の「余暇ヲ以テ見聞二随ヒ」この労作をまとめたのだと「緒言」にあり、毛利家に代々伝えられてきた史料類を存分に駆使することの出来た実情の一端をうかがうことができる。それだけでも充分に信頼できる編纂物であることが知れるのだが、毛利一族の発展の歴史を『もりのしげり』という優美なことばで表現したところに早くも編者のセンスの良さが感じ取れよう。「目録」と題された目次には、いくつかピックアップすると以下のような項目が並んでいる。「毛利家系図」「長府毛利家系図」「徳山毛利家系図」「吉川家系図」「小早川家系図」「清末毛利家系図」……。

毛利家の戦国時代から幕末維新に至る動向を学んだ方々に対しては釈迦に説法の類となってしまうが、戦国の名将にして西国筋最大の大名となった毛利元就には、世子隆元のほかに吉川元春、小早川隆景の二子がいた。これがいわゆる「毛利の両川」だからこそ、「毛利家系図」には「吉川家系図」と「小早川家系図」を添えることが不可欠なのである。

さらにいえば長州藩（萩藩）毛利家を宗家とするこの一族は周防の徳山藩毛利家、長門の長府藩毛利家、おなじく清末藩毛利家を支族（支藩）としていた。そこから毛利一族の歴史を俯瞰するには、これら支族の系譜を把握しておく必要も生じるのだ。一般に当主の娘たちの名前は「だれそれの女」としか書かれないものだが、これ

ら諸系図にはわかる限り女性たちの名前も明記され「和子」「映子」といった難読名にはルビの振られているのが親切な編纂方針である。

さらに本書には「一門六戸系図」その他一門六家の系図のほかに、「永代家老須佐益田系図」「永代家老宇部福原系図」、も収録されているのが興味深い。幕末史に関心のある向きなら「益田」姓からは益田右衛門介を、「福原」姓からは福原越後を思い出すことであろう。元治元年（一八六四）七月の「禁門の変」（蛤御門の変）にもうひとりの家老国司信濃とともに出勤したかれらが、敗北の責任をとって自刃したことは悲劇としてよく知られている。

これら三人のうち益田右衛門介と国司信濃が従容として切腹の座についたのに対し、ひとり福原越後のみはすぐには主命に従わなかった。それはなぜか、という問題も本書によって解明することができる仕組みになっている。

まず毛利輝元の二男就隆を初代とする「徳山毛利家系図」をひらくと、九代目元蕃のすぐ上の兄に元僞という人物があり、「宇部福原相続」とある。これが福原越後。越後は八代目広鎮の六男、元蕃は七男だから、越後は宇部福原家を相続していなければ徳山藩主になれたのであり、その場合は永代家老ではなく支藩の当主だから戦争責任を問われて切腹に追い込まれることなどあり得なかった。その口惜しさが、すぐには切腹しないという最後の行動となって表現された。本書は、使いようによってはこのように歴史の裏側を差し示してくれる書物でもあるのだ。

ほかに「旧長藩内学館表」「旧長藩内架橋及開作表」「歴代領地城宅表」など貴重なリストが満載されているが、私のもっとも注目したのは「旧長藩職役一覧表」のなかに「越荷方」が立項され、次のように解説されていることであった。

「赤間関二之ヲ置キ他国商品ノ貨物ヲ抵当トシ本助及ヒ撫育金貸付ヲ取扱シカ慶応元年十月八日其権限ヲ拡張シ営利ヲ専ラトシ藩外通商事務ヲ担当セシメ（略）慶応二年三月頃唐反物類を越荷方捌（専売）トシテ其運上金（税金）ヲ取立テ（此税金八軍艦買入費ニ充当ス）……」

慶応二年といえは一月二十一日に薩長同盟の密約が成立、六月には第二次長州戦争（四境戦争）がはじまる時期である。長州藩毛利家は本庁と越荷方にふたつの金庫を持っていたので開戦イコール藩財政の急激な悪化となる事態には陥ることなく戦争準備をはじめることが可能であった。右の記述からは諸藩では考えられないこのような経済的基盤を読み取ることもでき、私はまことに感に堪えなかつた。

ちなみに本書所収「毛利氏史要年表」もよくできていて、ここには毛利家にとって重要であった歴史上の出来事が百三十八ページにわたって記述されている。

これだけで優に新書にして一冊以上の情報が得られるといえは、本書がいかに充実しているかおわかりいただけるであらう。

本書の赤間関書房版奥付によると、昭和四十四年に復刻されたものは同五十年に再刊されたようである。それから三十五年、原本より美麗かつ堅牢な造りで知られたマツノ書店がこの貴重な編纂物の再復刻に踏み切ったことにより、旧長州藩毛利家の歴史はより読み解きやすいものになること疑いなしである。

目次

歴代正統元服縁組婚礼 一覧表	歴代領地城宅表	長府徳山(両毛利)岩国 (吉川)清末(毛利)士 卒階級表
歴代正統養子若殿家督 隠居大殿一覧表	末家一門領地邸宅表	長府毛利家職制表
歴代正統初入国目見要 害巡視一覧表	付益田福原両家領地邸 宅表	徳山毛利家職制表
歴代正統薨去年月年齢 法号墓地一覧表	毛利氏末家表	岩国吉川家職制表
歴代正室継室側室法名 卒去年齡墓地表	付小早川吉川共	旧長藩諸隊表
連枝法名卒去年月年齢 墓地表	毛利氏一門並益田福原 国司清水表	旧長藩軍艦表
主要神社及官祭銅像 銅碑一覧表	大江姓庶流表	防長両国古城趾表
歴代通称初名道号字一 字名雅号著作一覧表	元就公座備図五種 御儀式二種	毛利氏史要年表
旧長藩内学館表	敬親公時代御具足祝儀 式(元治元年正月十一日)	防長両国贈位人名表
旧長藩架橋及開作表	敬親公時代謡初儀式	附録
旧長藩内陶窯表	国其他発着表	封建時代一萬石以上諸 侯領地表
旧長藩内陶窯表	旧長藩士卒階級一覧表	旧幕時代諸街道表
		新旧時刻対象及方位表
		年号干支早見表

印刷を終え、増刷不可です！

■最近「並製」でも本を開いて手を離しても、本が閉じない方法があり、表紙は柔らかくて曲げ易く、しかも背割がおきない、「糸がかりの優れた並製」です。

■体裁
B5並製箱入・五八〇頁

■定価
一万円(税・送料別)

■予約特価
九千円(税・送料別)

■特価締切
27年2月15日(厳守)

■限定二百部復刻(番号入)

■発売
27年3月上旬

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK
山口県防府市東座2-13
5F 830-0425 295-1113
マツノ書店
URL <http://www.matsuno.com>

『増補訂正もりのしげり』の復刻を喜ぶ

山口県立山口博物館学芸員 山田稔

およそ毛利氏及び長州藩研究に取り組み、座右に備えるべき事典は何かと尋ねられれば、迷わず本書「もりのしげり」を挙げたい。

本書は、毛利氏関係事典の決定版として、すでに研究者の間でも高い評価を得ているが、今一度、その価値を確認してみよう。

内容は、「本支藩系図」、「歴代略歴表」、「歴代正室・継室・側室卒去墓地表」といった毛利氏一族に関する事項から、「旧長藩士卒階級一覧表」、「旧長藩職役一覧表」などの家臣団・藩制、さらには支藩の階級・家職に関わる事項まで広範に及ぶ。まさしく、毛利氏関係総合事典の名に相応しい充実ぶりで、これらの豊富で詳細な情報が一巻五六八頁に収められていることも驚嘆の一言に尽きる。

ここ一番で役に立つ、「旧長藩内架橋及開作表」、「歴代領地城宅表」、「旧長藩軍艦表」など、独自の視点でまとまれた一覧表が、数多く収録されている点も見逃せない。また、適宜、難読文字にふりがなを付けるなど、痒いところに手が届く配慮も、実にありがたい。

編者の時山弥八は、奇兵隊参謀時山直八の長男で、維新後、毛利家編輯所に勤務した人物である。

時山は、諸言において本書の作成経緯を「毛利家編輯所二在勤ノ余暇ヲ以テ、見聞ニ随ヒ摘要ヲ筆

記セルモノ既ニ二冊子ヲ成ス、今仮ニ之ヲもりのしげりト名ケ印刷ニ附シ、以テ贈与ニ代フ」と記している。企画・編集・刊行の労を取った時山の功績はいうまでもないが、肝心な点は、本書の内容が、長年の毛利家編纂事業の過程で蓄積されてきた、膨大な歴史情報の中から編み出されていることである。

ちなみに、毛利家文庫には、初版本の入稿用書き原稿が遺されている。これを見ると、すでに時山が便覧としてまとめた系図や職制表などに、入稿にあたって、多数の項目が追加・修正されたことがわかる。

次に、本書の成立について確認しておこう。初版本は、大正五年(一九一六)十一月、「稿本もりのしげり」と題して刊行された。五百部を印刷し、うち四二五部が、本家筋をはじめ、毛利氏一門、旧重臣や山県有朋、寺内正毅、杉孫七郎、木戸・伊藤・桂家ほか錚々たる顔ぶれ、さらに、師範学校、中学校、図書館、新聞社などに配布される。その後、昭和七年(一九三二)八月、「増補訂正もりのしげり」として刊行された。

遺されている初版本の寄贈礼状を見ると、「これより防長史研究之上ニ幾多之便宜を得べしと存じ大ニ喜ひ候(渡辺世祐)」、「編纂上多大之裨益有之と奉存候(妻木忠太)」、「誠ニ簡明にして譜代追懐之資料として八無上之珍本、此巻を緋八当代之史蹟歴然として眼前ニ躍如たるを覚申候(秋良朝之助)」、「毛利氏故事ヲ取調ルニ八片時も座右不

可離要書(御座候)(大田報助)などの賛辞が並んでいる。いずれも関係者としての素直な感想であろう。ただし、大田は「該編中、小早川系図ナキハ如何哉」と注文をつけている。

昭和七年、「増補訂正もりのしげり」としての再版に際し、前述の大田の意見などを汲んだものか、初版に収録されなかった「小早川系図」が追加されたほか、ざっと確認するだけでも、全体で一七〇箇所以上にわたって加筆訂正が行われている。また、初版は系図に赤色が使用される二色刷りであったが、再版では単色刷りとなるなど、文字通り「増補訂正」となっている。当初から訂正版を考えていた時山にとって、初版刊行後に寄せられた意見の中には、数々の有益な指摘が含まれていたことだろう。いわば毛利家ならびに多くの関係者の監修を経たことで、本書「増補訂正もりのしげり」の信頼性は、より高いものになったとも言える。

現代は、ネット検索、データベース全盛時代だが、一方で、冊子形態の事典の重要性を忘れてはならないと思う。活字の事典は、目を通していく過程で、偶然目に触れた項目から、ふとした発見や思考が広がるなど、ネット検索では味わえぬ喜びもある。

研究が細分化している現代、歴史研究の場においても、「木を見て森を見ず」にならぬ視点が何より肝要であろう。本書の活用が、「もりのしげり」を見渡すこと、換言すれば、大きな視野で歴史を思考する一助になることを切に願うものである。